

ローカルサミット宣言集 (2008~2017年の10回の歩み)

ローカルサミット事務総長
吉澤保幸監修（文責）

とちぎローカルサミット宣言（2008.07.11~13）

先進8カ国首脳会議が北海道・洞爺湖で開催された2008年7月、全国から志民が北の大地「十勝」に集まった。自然の厳しさと、広大で緑を中心にした色彩豊かな大地の息吹を五感で感じ取り、そのいのちの輝きに感謝しつつ、3日間に亘り、子孫から預かるいのち・地球の未来に向けて熱く語り合った。ここに参加者を代表し、全国、全世界の志民に向けて、次のように宣言する。

人類・いのち・地球が直面する危機は、グローバル資本主義に起因するところがあり、国民国家間の調整・協議のみでは解決できない。我々志民は、この危機感を共有し、これまでの延長線上に解決を求めるのではなく、忘れられかけている地域の仕組み、ライフスタイルの中に解決の手掛りを求める。日本がかつて有していた英知を学ぶことを通じて、生きとし生けるものを尊重し、循環と共生に立脚する「場所文化」を蘇らせ、発信し、連携していくことを宣言する。

蘇える「場所文化」は、利便性や欲望のあくなき追求をやめ、いのちの原点に立ち戻り、出あい、学びあい、助けあいに立脚する「ものづくり生命文明」を目指すものである。感動に裏打ちされた、志民によるこの実践を通じてこそ、いのちと自然の無事が図られ、地球の未来があると信ずる。

我々は、持続可能なローカル社会創出のため次の6つを実践する。

①くらしの起点を、いのちの原点である農林水産業におく。

②環境保全は、森里海の連環から構想する。

③まちづくりは、都市と農村との交流を組み込んだ農商工連携による。

④豊かさの源泉を利潤追求型の産業からエコファクチャーへと転換する。

いのちの輝きに貢献するものづくりに従事していく中で、人々の労働意識は「稼ぎ」から「仕事」へと転換する。

⑤金融は、貨幣に換算しきれない価値を増価させる新たな金融の仕組みも創出しつつ、貨幣価値至上の主客転倒から脱却する。

⑥学びは、いのち・心を大切にし、世代を紡ぐ伝統的共同体の教育力を再生し、活用する。

平成20年7月13日

とかちローカルサミット G8セッション

テーマ「持続可能な地域と金融」

セッションキーワード

- ◆カジノ化する経済、グローバルマネーの暴走が、我々の生活・いのちを脅かしている
 - ◆無事で安全な暮らしをまわす金融の在り方を問い直す必要
 - ◆今の金融の在り方をどう組み直し、更に新しいお金の在り方を問うか
 - ◆従来の間接金融・直接金融の在り方を問い直し、特に協同組織金融の原点に立ち戻る必要があるのではないか
 - ◆都市と農山村を含む地域では、十分な地域循環ができていない
 - ◆地域の貯蓄が地域で生かされていない(預貸率の低迷)

志民による具体的アクションプログラム

- ◆お金は人と人とをつなぐ単なる道具であり、それに振り回されることなく、金融は信頼と相互扶助であるという原点に立ち戻る
⇒貨幣愛に翻弄されない社会の価値観への転換を図る
- ◆貨幣価値絶対主義を崩し、貨幣価値に換算されない価値の大切さを生む新たなマネーフロー、金融の仕組みを構築する
⇒志民ファンドや農業ファンド等による都市・地域の志金の自然資源等への貯留とお金ではない形でのリターンを組み込んだ「志金循環」を、地域金融機関の創意工夫も得て実現する
- ◆更に減価するコミュニティー通貨や現代版講・無尽等の補完的金融の仕組みを創りあげ、無事で安心な生活を担保出来るようにする
⇒地域間の連携によるコミュニティー通貨のネットワーク化も具体化し、補完的金融を漸次拡大させて行く

とかちローカルサミット G8セッション

テーマ「持続可能な地域と経済」

セッションキーワード

- ◆経済社会におけるあらゆる「断絶」
 - ◆農山村社会と都市社会(川上と川下)
 - ◆資源産出国と先進国(南北問題も同じく川上川下)
 - ◆川下側消費社会側の「想像力」の欠如
- ◆企業や個人レベルの「社会的責任」意識の希薄さ
 - ◆全員参加型社会になっていない未成熟さ
 - ◆企業トップの社会的責任意識の欠如、市民レベルの意識の欠如
- ◆川下の消費者の「利便性」と「低価格指向」に引っ張られすぎている構造
 - ◆「コスト+適正利潤」の値決めの呪縛(プライシングの方法の誤り)
- ◆都市型生活の尺度で全国各地の経済状況を計測するという誤り
 - ◆統計その他、都市型生活を基準とする尺度で農山村社会など地方経済を図ることによる「画一化」への道

志民による具体的アクションプログラム

- ◆「川下」に立つ我々先進国の消費者・企業が、「川上」たる国内の農山村社会や海外の発展途上国への理解と想像力を養い、持続可能な文明のありようを構想する。
- ◆グローバル市場経済の中で、ローカルの価値を生かし見つけるため、プライシン

グ(値付け)の哲学を変えていく。

◇「売れるものを安く売る」ではなく、「価値あるものを高く売る」

- ◆鉱工業出荷指数や商業統計など都市目線の画一的基準でローカル経済社会を計り、地方に無用のコンプレックスを抱かせる悪循環を避ける。
- ◇ローカル経済社会の豊かさを正当に評価し、多様性を育てる「ものさし」を作り出す。

とかちローカルサミット **G8セッション**

テーマ「持続可能な地域とまちづくり」

モデレーターからの航路提示

- ◆「まちづくり」とは何か
- ◆多分、発端は、「名古屋栄東戦後復興土地区画生地事業」における三輪田さんの発言
- ◆「街づくり」から「町づくり」、その間「地域づくり」「まちおこし」「むらづくり」などの派生用語
- ◆まち、地域と何か→イメージできる広がりで！
- ◆收拾がつかない状況
- ◆一体、まちづくりは何処へいくのか

キーマン登場：藻谷氏。キー**1**=縮小文明

- ◆日本人が人口的に増え続けてきた時代の「まちづくり」が依然跋扈
- ◆地方では平均的に**15**年前に人口は減ったと実感
- ◆東京でも**7**年前から実感しているはず。
- ◆平均的に、**15**年前から日本は縮小へ
- ◆今、求められるのは、縮小時代に対応したまちづくりの考え方

キー**2**:市場経済に任せていいのか？

- ◆縮小文明と言われる時代に、私たちは、市場経済に身を委ねる、という選択肢を採用した。(させられた。)
- ◆選択と集中
- ◆経済、政治の単線化
- ◆しかし、市場のいうとおりにやってきたことが間違いだったのでは？
- ◆誰が主人公なのか？
現状認識・アクションプログラム→その**1**
- ◆地域の潜在的な力が十分に表に出ていない。
- ◆サイレントマジョリティの声が響かない。
- ◆潜在的な力、物言わぬ少数派の活動を当たり前のように生活の舞台に出していく作業が行われていない。
- 日本の都市(まち)は地方(むら)に支えられて成立してきた。この関係性を見直し再構築する。
- むらの側もすべての質を高めていかなければならない。つくり出すものを、共同体の中で熟成していく試みが重要
- そのためにも、添え稼ぎ、遊び仕事、マイナーサブシスタンスの価値の再評価をすべき

その2:地域からまち、まちから場所へ

- ◆現在、我々を覆っている課題は極めて明快。
- ◆ハイパー高齢化への対応、食糧問題への対応、環境問題、とえりわけ低酸素社会にどのように対応するか。
- 行すべきことも明快
- 場所を提供する(地域の良いものを包み込めるよう、少なくとも3年を見通して体験を重ねられるよう。)

その3:潜在的な地域資源をあからさまに

- ◆まちづくりのために必要な「地域の経営資源」が見通せていない。
- ◆仮にそれを見通せたとしても、表現する方法がわかっていない。
- ◆良いものがあっても、見通せなければ「生き甲斐」が得られない。
- ◆キーワードは「生活の提案」
- 普通の人々、女性(お母さん)が普通の言葉で自己表現できる場をつくろう
- そして、その「ほとぼしり」を形(販路)にしていこう。
- 地域資源の顕在化こそが「まちづくり」成功のコンピタンス

その4:地域のDNAを継承する

- ◆それぞれの地域が、地域の歴史を**DNA**に刻み込まれたものとして継承していない。
- ◆**1607**年、朝鮮特使を迎えた際の家康の対応。そこから発生する銀座の価値。
- ◆単に、歴史の再評価ではなく、歴史を生活者の体内に刻み込み、そこから発想していこう。
- ◆全体の質を向上させることは最終ゴールであっても、とりあえず、出来る人が輝こう。

その5:まちづくりにおける合意形成

- ◆地域の形態に応じて、合意形成の手法は様々にあるはず。あいまいな合意で(例えば多数決)決めてしまうことはあまりに危険。
- 直面する課題に応じて様々な合意形成手法を受け入れよう。
- 特に、法律家やコーディネーターを入れたリーガルマインドな合意形成手法の萌芽が見られており、こうしたやり方を上手に採用しよう。

その6:十勝へ

- ◆「豊かな食材」「豊穡な大地」「訪れる人へのホスピタリティ」は本物か。
- ◆十勝の人々が、現実に対峙する必要がある。
- ◆マスコミを巻き込み、真剣に現状を変えていく作業をする努力が必要。
- ◆これは十勝だけのものではない。
- ◆最低**3**年、こつこつと正しい事実を積み上げよう。最初は口コミでも、それを志民運動論に。

とかちローカルサミット **G8**セッション

テーマ「持続可能な地域と環境」

セッションキーワード

- ◆海と森の重要性、海と川と森をつなぐ鉄分の重要性
- ◆脊梁山脈から**2**万**1**千本の河川、日本の周りは海の森 日本の森林面積**70**%、高知では**80**%⇒しかし金がない

- ◆食もエネルギーも原料も海外依存、フードマイレージ
 - ◆食はいのちにかかわる、日本の魚は昔も今も海外依存、
- ◆化石燃料の枯渇は目前
 - ◆資源を利用するだけの経済からの脱却
- ◆自然を支配・利用する人間中心主義の限界、西欧近代合理主義の限界
 - ◆環境問題は人間の心の問題、**e.g.**海・湖・堀・川の汚れ
 - ◆“人間と環境“、“中央と地方“等の二分法からの転換

志民による具体的なアクションプログラム

- ◆海と森の多様な価値の認識、沿岸を大切にする教育・森と川と海をつなぐ教育の取組み―「地域循環圏」構想
 - ◆森里海連関学の普及、持続可能な漁業―**e.g.**定置網の見直し、水源の森づくり・郷土の森づくり・海の森づくりの拡大
- ◆「必要なものを必要なだけ必要な質で」資源投入、地域での循環・“地まかない”の拡大による経済性の自然な追求、**e.g.**なたね油利用の**BDF**・食料残渣利用の有機肥料、伝統的なものの見直し**e.g.**梅酢、我慢しないプラス思考
- ◆自然に対する考え方の転換
 - ◆エコシステムの中に人間がいる、ガイア思想＝「生かされている自分」の認識、「いただきます」＝いのちへの感謝の思想、農業もエネルギーも水産業も「つながっている」ことを自覚する、他人や他地域と比較しない自分のものさしを大事にする、マネーゲームに利用されない心構え、海外の「志民」との連携、東アジアでの**3R**の連携
- ◆【結論】「あほ;あつくほれ込むひと」の会の結成と連帯
あほになり、いのち見つめて、うん信じ、えんを大事に、おんもわすれず

とかちローカルサミット **G8**セッション テーマ「持続可能な地域と食」

セッションキーワード

- ◆「いのちと農」の循環の輪が壊れている。食料自給率39%という数字がその象徴。
⇒国内の地域資源を十分、生かしきっていない。
- ◆国内農業の荒廃が進んでいる。かけがえのない(無限大の)多面的機能が損なわれている。
⇒地域社会そのものの維持、人と人、人と自然のつながりの維持が難しくなっている。
- ◆「外国から食料を買えばいい」という政策が、世界一のフードマイレージ(9000億トン・キロメートル)に。
⇒世界の食料危機と地球温暖化を加速している。

志民による具体的なアクションプログラム

- ◆日本は、外国の農地を1245万ha(日本国内の農地は465万ha)借り入れ、全国の一般家庭での年間水使用量の約5・6倍に相当する627億立方mの水資源(バーチャルウォーター)を輸入していることと同じ。
⇒外国頼みとせず、食料の国内供給力を向上させる。
- ◆農業は食料供給だけでなく、持続可能な資源循環の維持、自然生態系の維持、美しい景観、地域文化の継承、自然と共生する価値観の共有などの機能

を果たしている。

⇒志民と連携して国内農業を維持する仕組みを創設する。

⇒消費者として日本の農業、食を買い支える

⇒本物の味がわかる味覚教育、食品の値段の意味を知る教育を行う

- ◆自国優先の利害のぶつかるグローバル・サミットだけでは、世界の食料問題を解決できない。

⇒志民それぞれが地域の資源をいかし、食と農林水産業のためにできることを実践し、うしなわれたつながりを取り戻すことで、持続可能な社会を構築する

とかちローカルサミット G8セッション

テーマ「持続可能な地域と教育」

セッションキーワード

- ◆様々な悲惨な事件が生じているが、それはなぜなのか？学校の問題で済まされるものではない！
⇒家庭、学校、会社の問題の連鎖、つまり社会全体で人を見守るシステムがないことが問題
- ◆個と公共と言う二分法の中にいる人間の心の不安定さ
⇒地域社会の人間関係や家族の絆の重要性、人との関わり合いの醸成が大切
- ◆リアルとバーチャルの区別がつかない中でいのち・心の重要性の崩壊
⇒自然や社会へのふれあいが不在、遊びの自己中心化等の問題、気づきのなさが原因

志民による具体的アクションプログラム

- ◆家庭、地域の持つ基礎教育力と母親力の復活
 - ◆家庭、地域こそ、人の生き方を伝える場であり、基礎教育の実践を教えること
- ◆祖父母から学ぶ非文字学問の大切さ、父母、隣人からの叱りを行い人との関わり合いを教える
- ◆自然体験等の体験学習教育の普及
 - ◆親も一緒に学ぶ運動へ
 - ◆人任せにせず、仲間とともに生きてゆく術を伝える
- ◆地域共同活動への積極的参画を
 - ◆地域の自慢できる大学、組織を活用する
 - ◆気づきを身につけ自然と他人に感謝する心を持つ
 - ◆地域の誇りを知ること、皆で共有すること、子孫へ伝えること
 - ◆志を同じくする人々が力を合わせて生きてゆく
 - ◆映画塾を実践し広めてゆく
 - ◆「とかちの・・・」のように東京は実践場所として活用する

第2回ローカルサミットIN松山・宇和島（2009.11.21~23）

昨年の第一回とかちローカルサミットに続き、今年もまた全国から志民が、四国松山・宇和島に集った。

昨年のローカルサミットの際にグローバル資本主義に起因する人類・地球・いのちを巡る諸問題を提起した。昨年秋のいわゆる100年に一度といわれる金融危機によって、それらの問題が一挙に表面化した。お金が主人公となり、経済効率性と利潤を追求する市場原理主義、グロ

ーバリズムが行き詰まり、人間の物的欲望充足を追求してきた物質文明が終わりを告げようとしていることを肌で感じつつ、そこから抜け出せない我々がいる。新たな時代・新たな文明をどのように紡ぎ出していくのか、悠久の時間に思いを馳せながら、車座になって、熱く語りあった。

ここに参加者を代表して、全国、全世界の志民に向けて、次のように宣言する。

我々が扉を開けようとする新たな文明とは、全てのいのちがこの美しい地球に育まれていることを強く感じる人間からなる。人間や動植物のみならず、天地を形づくる地水火風空すべてにいのちが宿ることを感じて祈り、己を含めたすべての多様ないのちの輝きに感動し、それらが時空を超え一つの大いなるいのちとして結び合い、輝いていることを心が了解する人間である。そして、土に根ざし、生と死からなるいのちの営みを営々と紡ぎ、伝えていく社会からなる。

それは、我々日本の民衆が、縄文以来の稲作漁撈文明のもとで培い、守ってきた自然観、

世界観に他ならない。「利他の心」と「慈悲の心」に立脚した生命文明、すなわち、人と自然との共生、すべてのいのちが繋がりあう文明こそが、新たな文明の核心となろう。物質文明を支える経済活動は有限であるが、大いなるいのちの輝きの価値は無限である。

そして、いのちの輝きは祈りをこめた手仕事に結晶する。

「いのちが繋がるものづくり生命文明」は、「確かな未来は懐かしい過去にある」という確信に裏打ちされた「逆ビジョン」を携え、それぞれの生と死を見据えるローカルな地域を基点に、人と自然、人と人、世代を超えてのいのちの、新たな結び合いを紡ぎつつ、それぞれの地域で共生、共創する志民によってこそ構築されるであろう。

我々志民は、こうした了解を共有しつつ、そこから具体的に持続可能な地域社会をトータルにデザインしていくために、いのちを巡る8つの分野につき、これまでの実践を踏まえて深く議論し、各分野について、以下のような具体的指針を提言することとした。

<食・農>

『志民が「農」とのつながりを見つめ直し、地域での顔の見える信頼関係を紡いでいく。土、水、作り手の多様性を大切にし、持続する環をつくり、笑顔で参加する志民を増やす。』

<環境・森里海連環>

『森里海連環基本法（憲章）の制定を行い、総合的な環境政策を実行する。経済性・効率性

優先から、自然に対する理解と自然の側からの発想を基にした「生命文明」に考え方の転換を図り、江戸時代の循環型生活様式の知恵に学び、統合された一次産業の再生こそが日本の再生、環境問題の解決の鍵である。孤立した個別科学・縦割りの政策から転換し、統合された科学・技術に基づく総合的な政策へ転換を図り、各地域で実践していく。』

<まちづくり>

『私たちの手の届く範囲としての地域において、私たちが生き生きと活動することができる地域を志向する。そのためには、非市場経済的な価値観を前提に、ミッション指向型の行動を興していく。そのことが私たちに、賢明（懸命）に生きるに値する場所を啓示する。だからこそ、

何よりもまず、私たちが、死民から市民へ、そして志民へと志向するとき、「まちづくり」活動は「まち育て」運動へ深化する。』

<産業・経済>

『地域の恵みを地域で楽しむ「地恵地楽」を提唱する。地域資源を丹念に育て、あるいは磨き込み、旨いモノ、美しいモノに仕上げ、世の中に伝えていく。

内からの努力と共に、外（＝よそ者）の力を受け入れ、互いに学び合い、伝え合う手間と時間が必要である。作り手がモノづくりに専念できる環境づくりも、必須である。そこで生まれた本物を世の中に出す「本質を伴った演出」がキーである。そこに新しい流通が生まれる。』

<地域金融>

『助け合い金融の機能をも担った無尽・講などの伝統の叡智に学びつつ、グローバルマネーの複利・短期投融資の論理から脱却するローカルファイナンス（志民金融）を漸次、各地で、志民と地域金融機関、自治体との連携の中で創出していく。お金はそれ自身目的ではなく、いのちを紡ぐ手段であり、その時、リターンも、お金ではなく、感謝・信頼の証として得ることになる。高度に技術化した金融を手仕事の文脈でとらえ直し、金融にいのちのぬくもりを取戻す。』

<教育>

『次世代を育てる地域の学校教育においては、3つの力の融合が不可欠となる。「学校力」は、自然界が有する多様性を、学校という場を通じて子どもたちに自らのアイデンティティを確認させ、他との関わり合いの中で共感的に理解をしていくことを可能とする力であり、「教師力」とは、教育的愛情と使命感を持ち、豊かな人間性を礎として子どもに関わり合い、子どもが自ら動くことを引き出す力をさす。そして子どもが身に付ける「人間力」とは、過去からの「いのちの繋がり」を踏まえ、自分の足元をしっかりと見つめ、その上で自らの次の行動を選択する力であり、家族や社会の一員として誇りと責任を持ちつつ、それぞれの才能を開花させる力である。』

<健康医療>

『自宅で生まれ、自宅で亡くなる例が減り、生と死を見つめる、あるいは感じる機会が失われてきている。「十分生きた価値があったと皆で讃えて、寄り添い、看取る」環境を、それぞれの地域で、住民自らが創りあげていくことが肝要である。老若男女、心身に障害のある方を含む全ての人々が、足るを知り、利他の心で支えあう「地域共助」が、持続可能な健康医療を支える礎となる。』

<アジア連携>

『ローカルかグローバルかの二極論から脱し、異なる視座を持つ者同士が発見し、協力することが多様な文化を残す唯一の策と考え、そのためにも、いのちをつなぐキラキラ人をつくりキラキラ人がキラキラ人を生む循環を構築していく。』

これらの各指針は、それを相互に関連させていくことで、持続可能な地域社会をトータルに構築していく基本設計となるものである。志民自らが、それぞれの地域で自治体や地域金融機関、商工業者、医療・教育機関、政治等の立場から、土に根ざし、いのちを分かち持つ同じ志民として役割分担をしつつ連携し、これらを実践すること、そして、地域を越えて志民と志民が相互に連帯していくことにより、確かな未来を切り拓くことができると確認した。

価値観の転換を伴うこれらの実践を通じて、我々志民は、グローバル化する市場経済や国家のみに依存するのではなく、地域における新たな結び合いをつかみ直し、無事でいのちが輝く暮らしを実感し、次世代に着実に地球のいのちを繋いでいくことが可能になるものと確信する。

平成21年11月23日

第3回ローカルサミットIN小田原（2010.10.22~24）

まとめ



いのち甦るまちづくり～小田原モデル～

- 小田原の風景・ものづくりの心呼び起こし、家業を育てていく
ものづくり～商流～あきない
- 森・里・海・水・土・風、全ての繋がり、連環を実感・体験していく
食～農林水産～環境～教育
- 小田原愛にもとづく顔の見えるお金の協同利用を図る
金融
- まち中、地下街にいのち癒す共同体をつくる
健康・医療・介護
- 伝統、歴史空間を未来へつなぐ
美と空間
- アジア、世界の人々とのいのち輝く交流を図る
アジア



まとめにあたり

緊急提言

G11 各々の部会で、各々のテーマについて掘り下げた活発な議論の結果が発表された。そして、どの部会からも“あたらしいモノサシ”を志向し創りだす視座には、必ず共通する提言があった。

私たちの “いのち”そのものへの、今、再びの“気づきと感謝”,というとらえかたの必要性である。

このプロセスぬきに、どのテーマにおいても、よりよき未来への地図は描けないという共通認識を得ることができた。

とりわけ、ここ、開催地“小田原モデル”を考える、という共通テーマの議論の中で、第3回ローカルサミットを閉じるにあたり、『環境部会』と『アジア部会』からの緊急提言がなされ、ローカルサミット出席の志民総意として、ひろくその提言を発表し、実行へと努力を続けていくことが確認された。

『環境部会』からの提言

＊『森里海連環基本法（憲章）』策定にむけた志民運動の開始を！

＊その具体的フラッグ行事として

6月第一週末の翌月曜日を 国民の祝日に！

（6月はじめの植樹祭＋稚魚放流祭 ÷ 2＝ 森＋海！加えて 6月にだけ祝日がない）

＊問題提起のための『シンポジウム』等の開催を！

森里海連環基本法(憲章)

人間は、今一度、生きとし生けるものの「いのち」の原点に立ち返り、人間が森里海の連環する大いなる地球の自然・生態系に包まれて存在し生かされていることに目を向け、自然と人・人と人とは全てつながっているという価値観をいかに取り戻すことができるか、そのような価値観に基づいて人間活動をいかに利他的なことに喜びをみいだせるように軌道修正できるかが、真に問われている。

このような「生命文明」の時代における人間のあり方、自然・生態系へのまなざし、「いのち」への洞察を、共通の了解として確認し、それに基づく人間活動の軌道修正を可能とするべく、

「森里海連環基本法（憲章）」の策定が急務である。

(中略)

多様性に溢れる豊かな海、そして森と水に恵まれた大地・自然からなるわが日本、そしてそこで「いのち」を営む日本人こそが、この法（憲章）の具体的策定を行い、人の自然への働きかけの再構築を通じて温暖化や食糧問題、更には人間活動を取り巻く諸問題を解決するための懐かしい未来へのグランドデザインを描き出す。それをアジア・世界に発信していく。このことは人類史において日本人に課された歴史的使命ともいえるものであり、そうした観点から幅広い志民運動を今後強力に展開していくこととする。

『アジア部会』からの提言

＊『小田原モデル』とは、言い換えれば『豊かな海と 豊かな森に囲まれた 豊かな里での暮らしかたの再確認と再構築』ということでもある。

東京からのほどよい近距離ぶりを発揮し、かつ、地元の人々にとっては『アタリマエ』にすぎ、感謝どころか、認識することすらなく

なってしまった、この自然の恵み（森・土・海）の豊かさを再び認識

再構築するための『原体験プロジェクト』とも呼べる具体策を官民挙げて創りだそう！（無尽蔵プロジェクトと共創しながら）

＊そして、かつての第二次大戦はもとより、それ以降も、平等な関係性ではなく、経済至上主義驕進の下、ひたすら資源や市場としてしか捉えてこなかったアジア各国への『恩返し』としての意味もこめて、そうしたプロジェクトを通した新しい繋がりを創っていこう！

ローカルコミュニティが、食糧やエネルギーといった“いのち”をゆたかに育むための循環のマネジメントを、自身で自信をもって営めるようになることこそが、わたしたちLSのひとつの目標であり、ミッションだと考える。

それこそが、ひいては、我が国、日本のこれからの成長と貢献の軸にもなることも、アジア部会では確認した。

『ローカルサミット』という日本各地域が主体となって、『懐かしき美しい いのちの未来を拓いていく』という共通の目標を設定し、共に、アジア諸国とのネットワークを繋げていくことを、今後のローカルサミットのテーマの軸としていくこと。その第一歩として、ここ、小田原の地においても、具体的な「留学生原体験プロジェクト」等をたちあげ実行していくことを提言する。

今年も全国から志民が集まった。深い精神風土に彩られた「土徳の里」富山南砺に。

いのちが、今、脅かされている。**9.11**から**10**年が経過し、**100**年に一度の金融危機を経て、グローバル資本主義の混迷の度は増している。そして、**3.11**に我々に襲いかかった**1000**年に一度の大震災と津波という自然の災禍と原発事故という人間の災禍は、半年を経過した今もそこからの復興の道筋が見えていない。目に見えない敵となった放射能の不安と恐怖に、未だ怯えている。

この間、戦後の日本経済社会は、世界的交易の輪の中に自らを組み込み、全てお金で暮らしを、いのちを購えると確信してきた。しかし、今回の東日本大震災と原発事故はその象徴ともいえる首都圏の自立していた暮らしの虚構性を浮かび上がらせた。

これまで成長、効率、高齢化等の観点から世界の最先端をひた走ってきた我が国が、脅かされている「いのち」をどう自立的に回復させ、「いのち」を次世代に確実に継承できるのか、諸外国も注目している。

こうした課題を胸に、ここに集まった志民は、過去**3**回のローカルサミットでの議論に今一度思いを馳せた。

即ち、人類・いのち・地球が直面する危機は、グローバル資本主義に起因することを確認し、これまでの延長線上ではなく、忘れかけている地域の仕組み等に解決の糸口をみつけ、場所文化を甦らせいのちの原点に立ち戻る「ものづくり生命文明」の構築をめざす。

そして、我々が希求するいのちを繋ぐ「ものづくり生命文明」は、「確かな未来は懐かしい過去にある」という確信に裏打ちされた「逆ビジョン」によって、ローカルから構築され、従来のお金で全てを計ろうとするものさしに変え、もう一つの「いのちのものさし」を携えて、多様性溢れる豊かな海と森、水に恵まれた自然に抱かれた日本の原風景の地域から、いのち輝く「懐かしい未来」を早期に再構築していくことを確認してきた。

更に、そうした持続可能な地域社会の構築に向けて暮らしの各分野の見直し、再生の具体的指針等を熱く議論し、提示してきた。

そして、今年この南砺では、更に東日本大震災と原発問題に直面し、今こそ、戦後**66**年間の物質文明追求の都市中心の社会システムのあり方を総括し、深い祈りと共に、東日本の復興を通じて、ローカルからの「新たな暮らし方」によるいのち輝く「環境生命文明」の地平を切り拓かなくてはならないと確認した。

その時、従来からの成長・効率のグローバリズムの延長線上に、確かな未来への希望は無く、ローカルからの、人と人、人と自然、生者と死者、更には人と技術、との確かな関係性を取り戻す「いのちの紡ぎ直し」による「地域の自立と連携」が必須であり、また人智の及ばぬ形で永遠にいのちの価値を捨て去ろうとする原発問題にもきちんと対峙しなくてはならないことも共有した。

この文明史論的な転換点、言わば日本にとっての「第二の戦後」にある今、覚悟を持って価値観と暮らし方の転換を図らなくてはならないと深く心に刻み、**3**日間を過ごした。

初日、二日目は、山深い利賀村で、懐かしい確かな暮らしにふれると共に、「瞑想の郷」を中心に、キースピーチと瞑想を通じて、人間が自然から離れすぎた現実に対し、海・里・森からの祈りあふれるいのちの生業の大切さと人と人、人と自然、生と死の確かな関係の再構築から価値観の転換を図らなくてはならないことに思いを深め、その上で、地・水・火・風・空に分類された**9**つのテーマ別分科会で東北の復興と日本再生に向けた「新たな暮らし方」の具体像について熱く議論し、志民の交流・連帯の輪も広げた。

そして最終日には、城端の里に降り、逆さ日本地図の中からアジアの視点か

ら森里海を通じる「いのちの連環」の姿を掴み取り、更に「首長サミット」を通じて東北の復興が目指すべき姿や日本再生に向けた「地域の自立と連携」における志民と首長との新たな関係の構築にも議論を深めた。

我々志民は、3日間を通じ、「いのちの紡ぎ直し」をキーワードに議論し、眼前に生じた都市起点の巨大システムの瓦解に対し、もう一度等身大のローカルからの確かな「いのちの繋がり」を取り戻すには、お互いに、「目に見える関係性」を外に開きながら共有していくコミュニティーの再構築、いのち巡る「小さな循環」の形成と連携が必須であることを明確にした。そして、我々が以下のように描き出した東北の復興に向けた継続的支援の方途と地域からの日本再生プランは、9つのテーマ毎のアクションプランが相互に連環しつつ具体化されなくてはならないこと、そしてその起点は、いのちの自給・自立であることも深く確認した。

<東北復興への継続的支援の方途>

- ・復興協同組合や復興会社設立等による志民と行政、および非被災地との協働・支援関係の構築をベースにした復興支援活動の推進
- ・流域ごとの森里海連環によるいのちの自給・循環体制の構築と都市との支え合いの継続
- ・食・エネルギー・健康医療の自立・自給モデルの構築・具体化し、アジアにも発信する
- ・目に見える関係性の構築による相互交流特に子供達等の継続支援の強化
- ・放射線対応を含む女子および高齢者に対する健康医療・介護福祉面での支援体制の拡充
- ・共通の祈りの形を作りあげながら自然・風土の復興支援を図る
- ・豊かな金融資産を活用した継続支援のための温かなお金の使い方の創出（復興支援通貨や二重ローン問題対応等）

<地域からの日本再生プラン：「新たな暮らし方」とは？>

- ・新たな豊かさの起点を、衣食住の自給に据え、農的暮らし（＝いのち育む生業）への人々の関わりを増やすことで、人と自然の関係を取り戻していく。
- ・いのちの自給は、農林水産業の再興、エネルギーの地域内自給、健康医療の地域内自立をコアとする、「小さな循環」の形成と連携によって実現していく。
- ・地域資源を活かした志民によるエネルギー自給会社の設立によって、地域資源を見直し、地域と国等との関係性や国の政策のあり方の変革を促す。
- ・森里海連携による地域再生やエコビレッジ構想等の具体的モデルをアジアの地域社会再生に役立てていく。
- ・土徳に化体されたいのちの繋がり、お互い様、お蔭様を次世代に継承していくためにも子供達はかけがえのない存在であることを生活の中で再度徹底していく。
- ・精神の向上を至上の価値とし、共同体を支える共有する祈りを創出していく。
- ・まちづくり会社等を通じ、志民と首長・行政の連携の枠組みを構築していく。
- ・地域内で雇用を生み、お金が廻っていく新しい金融を模索し、資本主義を補完する志本主義の構築を目指す。

改めて要約して言おう。

今回の東日本大震災と原発事故は、すでにグローバル物質文明・資本主義・近代の巨大システムが限界と綻びを露呈して移行・調整過程を模索している転換期に、転換の方向性を後押しする形で発生した。

一方で、我々を取り巻く、この戦後66年間に物質的豊かさを追求し構築してきた近代の都市型社会システムは、様々な巨大システムの複合体としてあり、

我々の日常生活の隅々にまで及んで日々を規定して、そこからのいのち・身体が皮膚感覚で無事だと感じられる暮らし・社会を築き直すのは決して容易ではない。特に、当面のアジア・世界の経済発展が、近代パラダイム・巨大システムを貫徹させる方向で進みつつあるこれまでの展開からすると、その変革もなくしては、**21世紀**を通じた世界全体の未来は無いと確信する。

このような日常生活を含む広く世界を取り巻く巨大システムの大きな存在に対して、我々は、上述のように、食とエネルギーと健康医療等のいのちの分野での地産地消・自立分散を「小さな循環」の中から具体化し、無事な暮らしの構築をローカルからの「いのちの紡ぎ直し」をベースに東北の復興を起点に日本で新たに起こし、世界に可視化していこう。そして、このローカルのうねりを様々なレベルでの国のあり方・政策の修正という形で巨大システムにフィードバックさせながら、巨大システムの内部からの軌道修正を誘発させ、アジアへも強く発信しつつ、その自己制御を同時に促していくという両面戦略を、覚悟を持って力強く展開していこう。

世界的な食料問題、人口問題、地球温暖化問題、そしてグローバルマネーの行方等は、緊急の課題となっており、そうした制約条件の強まりは年を追って厳しさを増している。そして、特に原発事故は、次世代のいのちに未来の時間を失わせ、いのちの希望を絶やそうとしている。次世代にきちんといのちを繋ぐことを最優先しなくてはならない。

こうした中で、東北の復興は必ずしも短時間で成し遂げることは容易ではないが、日本全体の英知を結集し、かつ様々な形で目に見える関係をローカルから再構築していくことで支援も継続し、いのちを未来へ繋ぐスピードを加速させていかなくてはならない。そして、その過程で、日本の戦後経済社会の再構築、新生も必ず実現させていかなくてはならない。

今から**200**年前、二宮尊徳の「報徳仕法」が、現在の原発被災地の多くに及ぶ相馬地区で、南砺地方からのいわゆる「入り百姓」との連携のもとで実践され、当時の厳しい自然・社会環境のもとで、強い祈りを込めた共同的な自然への働きかけ・ものづくりによって、いのちの輝きが増し、当地区全体の社会再生が実現した。そこに現れたような、厳しさと温かさあふれる「土徳」の力、この南砺が本来持ってきた精神風土こそが、今の東北復興と日本再生に求められているのではないかと強く感じた。

我々が今希求する、確かないのちが未来へ繋がる「環境生命文明」の扉は、こうした祈り豊かな精神風土に裏打ちされた懐かしくも確かな「ものづくり」、「ひとづくり」、「関係づくり」をきちんと取り戻すことによって開かれると確信する。

平成**23**年**9**月**25**日

富山・南砺にて

第**5**回ローカルサミット**IN**阿久根宣言（**2012.09.15~17**）

第**5**回ローカルサミット**IN**阿久根に集った志民は、最大級の台風の接近・通過という北薩摩の自然の厳しさと森里海の豊かさを全身で感じつつ、**3**日間の温かな交流と熱い議論を経て、ここに以下のことを宣言する。

我々は、基調講演で、「東日本大震災の復興を通じ、『漁師は海を恨まない』という言葉に象徴されるように、稲作漁撈文明である日本古来からの人と自然との優しくも厳しい信頼関係を取り戻し、森・里・海の連環に基づくいのちのやり取りを実感しながら、他者の幸せのために生きること、日本再生を図り、幾世代間に亘り営々と「いのちのバトンタッチ」が出来る暮らし方をローカルから再創造していかなくてはならないと確認した。

新しい暮らしは、何よりも、いのちの原点に立ち戻り、生きる意味を問い直すと共に、生きる希望を子供たちと一緒に考え、世代を繋ぐ仕組みを、「ともに働き、ともに生きる」ローカルの小さな自立した循環の中から創り上げ、これまでの「成長、拡大」ではなく、「受け継がれる生き方への深化、豊かな関係の中での共棲」という新たな豊かさを追求する実践の中から育まれることを、7つの分科会の議論を通じて共有した。

そして、各分科会で確認された次のようなアクションプランは相互に関連し、志民各自がそれぞれの分野で一人ひとりが行動を変え、それを繋いでいくことで「原発に依存しない新たな持続可能な地域社会」が創られると確信した。

1. 被災地では、利他の心を発揮し、生きる意味を問う様々な行動を起こしながら、未来を担う子供たちと共に希望を見出していく。
2. 長期的視点での森・里・海の連環の取り組みを行いながら、小さくてもオ
ンリーワンの仕事を重ねつつ、親の背中を見せていく。
3. エネルギーと食の自立から小さな循環を組み立て、多数の連携を図る。
4. 人類の存続に対する危機感を正確に持って、身の丈に応じた暮らしの中で、等身大の地産地消のエネルギーを実現し、次世代を育てていく。
5. アジアを知り、協業し、交流する、具体的アクションの一步を踏み出す。

そのために、ローカルサミットINアジアの開催を提唱する。

6. 首長、議会、行政、市民相互の信頼関係を築きながら、自らが参加する民主主義のプロセスの形成を図る。
7. 「華の50歳組」を繋ぐ「88歳組」の伝承ミッションを導入し、広げる。

更に、こうしたローカルからの新たな暮らし方は、何よりも、志民と首長の共感・参加・協働による「新たなまつりごと」によって、不断に革新しつつ、いのちの持続を確かなものにするように深化していかななくてはならないと、首長サミットでも確認した。

我々はこうした自然・社会の各層での様々な新たな関係性と協業の仕組みを早急に構築しながら、いのちを営々と繋いでいくことに世界に先んじて価値軸を移行し、アジアとの具体的連携を深めていくことで、アジア諸国との共棲も図っていききたいと強く念じている。

平成24年9月17日
九州・阿久根にて

第6回ローカルサミットIN上州・南相馬レポート（2013.09~11）

上野村（9.28~29）／桐生（10.5~6）／中之条（六合）（10.10）

2013. 10. 14

ローカルサミット事務総長

吉澤保幸

1. 上野村：世界に誇れる上野村（参加者5~60名）

—高齢化率の極めて高い隣村（南牧村）と違って、U・Iターンが多いのはなぜか？

- ① 元々街道筋の村で、外に開きながら、交易を行う一方、極めて近い自然に向き合いながら自らの存立基盤を見つめてきた。目線は、遠くにも及びながらも、足元の暮らしをどう成り立たせるか、黒沢村長時代（1970年〜）から大切にしてきた。
- ② そこでは、決して大きくはないが、通常のお金の巡りがある一方で、相対的に厚みのあるお金とは一線を画する「いのち巡る暮らし」が共存している。それは、林業や木工等であり、最近では、自然の中に無限の可能性を見出すCAFÉ YOTACCOのような営みも生まれてきている。
- ③ 多様な行事（祭りや普請作業等）等を通じて、濃密なコミュニケーションが生まれ、子ども達にフィールドワーク的な非文字の教育が施されている。
- ④ そして、生業を生む仕事とは特別な、大規模なものではなく、暮らしと密接不可分な小さな形で見出されていくべきというのが、上野村型里山資本主義の方向感。

—当日訪れた外国の方（台湾、中国）からみても、山村としての豊かさと質の高さを実感していただいた感。

—ただ、村の課題も指摘された。即ち、これまでの全てが村営事業という形態が今後も続くか、新しい公共のあり方が問われている。それも含めて、上野村型エコビレッジ（地域内発電、馬の復活、世界に開かれ、世界の人たちが訪れる村）の模索を続けていく。

2. 桐生市：子どもを核にした地域経済活性化（同上30名程度）

—無限の可能性を持つ子ども達に何を伝え、どう教育していけるか？また、群馬県全市中一番の高齢化率のまちをどう未来へつないでいけるか？

- ① 子ども達には、自然と歴史に触れるフィールドワークが一番ではないか。
- ② そうしたフィールドワークを通じて、子ども達と高齢者との間につながりが生まれ、様々な知恵が伝承されていく。
- ③ こうした活動を、U・Iターンの若者たち（特に子育てに注力する女性たち）に多いに期待したい。

—U・Iターンには、大学（群馬大工学部や東京福祉大）との連携やクリエイター（映画や芸術等）との関係構築等も重要。

—「大風呂敷」住人の山田さんからは、街の本当の豊かさを測る物差しとして、「とうふ屋指数」（地元のとうふ屋がよいとする消費者の存在、効率や廉価という一般経済的環境との断絶、後継者の存在、という諸条件を満たす、とうふ屋が街にいくつあり、残っているか）の話を聞きながら、それを評価する高齢者と一緒に後継者をよびおこせるかが、桐生の課題という指摘を言う指摘を受けた。

—また、桐生のまち再生を目指し、長く活動されている長老達（FM桐生代表他）が、次の世代にきちんとバトンタッチしようとする動きが出始めている。

3. 中之条六合：六合の暮らし、こんこん草履が伝えるもの、六合の魅力（同上30名程度）

—六合の暮らしの面白さ、100年後の六合の姿はどうなるのか？U・Iターンの人にとっての六合の魅力は何か？

- ① 地域の掘り起こしをもっと行い、地のものを地で消費していく（ののや）、大きな循環ではなく小さな循環（東京野菜でなく、草津やさい）を自信を持って行うこと。もっともっと自然の無限の可能性を引き出せるのではないか。「六合は自然のゆりかご」
- ② 「ねどふみ（スゲを尻焼温泉の川床につけて、しなをよくすること）とこんこん草履」に現れているのは、お金と切り離された価値であり、自然と歴史の中でゆっくりと暮らす豊かさである。
- ③ 地域の問題を解決するには、逆説的ながらローカルこそ効率的で便利である。なぜならそこには人と人、人と自然等とのつながりがみえているから。

―後継者不足の中、四万温泉の継承、そして六合の中で、U・Iターンを受ける稼ぎはどう作り出せるのか？という問いが底流している。

―山口さん（半農半林の達人）との次のような会話をしたが、「六合の産業ではなく、山口さんの産業（稼ぎの形）を創ればよいのである」、そして「血縁による後継者よりも、地縁を創っての後継者の方が、持続するかも」、そうした中でヒントがあるか。

○以上、第6回のローカルサミットの前半3箇所のセッションを通じての共通のテーマは、藻谷さんの近著に習えば、各地での地域再生の肝は、通常のお金に換算されないような「里山資本主義」的な暮らしをどう作って、今の暮らしに組み込んでいけるか？であったように感じた。

そして、そのためには、①高齢者（懐かしい過去）と一緒に暮らしながら、②通常のお金とは一線を画した暮らし（仕事）をつくり、③通常のお金も極力地域内で廻し、④自然や歴史をもっと磨きながら外に開いていくこと、⑤更にベースとして暮らしのインフラ（インターネット等）の整備を極力図ること、といったことが重要なポイントになるうか。

○それでは、これまでのセッションを経て、南相馬では何を議論していくか？

先日、南相馬市立病院の金澤院長に宛てた小職のメールが、一つの問い掛けになろうかと思量しますので、ご参考までに。

「未曾有の高齢化と高齢化を支える大地の破損が一挙に生じた南相馬で、どのような復興の仕方があるか？正直言って誰にも解は見出し難いと思います。

しかし、この場所に永遠を感じ、これまでの歴史風土に感謝し、その次の世代以降にも精一杯つないでいけるように希望と元気を出さなくてはなりません。

そのための具体的な小さな営みを重ねていくことが必要と思います。

この間のローカルサミットを通じて、小職は、そうしたアプローチを「いのちが巡る小さな循環の仕組みを作り上げるエコビレッジ構想」とよび、南砺でもその具体化を急いでいますが、その南相馬バージョンをどう作り上げるか、高橋美加子さん達と語っています。

原町と小高の間に構想されている、「再エネの里（放射能に汚染された土地を精一杯除染し、そこにエネルギーと放射能を蓄えない新しい農産物を作り、医療・介護と教育の施設を作り、世界に開く若者たちとの交流の場を創る！）」

といったPJですが、そうした動きに更にアート等の活動や教育・研究機関の活動を加えて、世界の若者たちの集える場所を創り上げ、相双から新たな動きを発信できるようにしたい。こうした動きを、全て行政に頼るのではなく、内外

の志民の連携と地元のお金で賄うことで、いのちの循環を再生していき、小さな雇用と長期の時間軸での自立を目指したいと、考えています！

こうした実践に向けた絵を皆で語り合い、具体の形を少しでも描き出し、今回のローカルサミットを出発点に相双の人たちが手を携えて動き出せればと念じています。

いずれにせよ、19-20日が相双復興にむけての一步になればと願いつつ、伺わせていただきます。」

第6回ローカルサミットIN上州・南相馬レポート（その2）

南相馬セッション（2013.10.19~20）

2013. 10. 25

ローカルサミット事務総長

（文責）吉澤保幸

○南相馬市：「おらほーのまち、なじょにすっぺはあ〜」（域外50名強、地域内100名強）

ーこの間のローカルサミットで共通認識を得た「確かな未来は懐かしい過去にある」、「ローカルからの新しい暮らし方（エコビレッジ）」、「いのちのバトンタッチ」等のキーワードを携えながら、未曾有の高齢化、つながりの分断、大地の汚染、等東北の震災問題（地震、津波、原発等）が集約した相双地区で、復興に向けての希望のメッセージを紡ぎだせるか？つながりを失った様々な諸団体が連携しうるか？この地で永遠を感じていのちを繋いでいけるか？こうしたなかで若者たちと大人たちの対話がどうなりたつのか？

ー相双の復興なくして東北の復興なく、それなくして日本の再生はなく、人類の存続もない！という認識を共有しつつ、若者や様々な内外の方々との語り合いの中で、自分ごととして、他者を尊重しつつ、未来を見出していく、相双ダイアログを展開した2日間！

① 基調講演（確かな未来を創るために！）

・赤坂先生：みちのくアート巡礼へ！（アートは本質を貫き、体制を宙ずり

にする。人の心を揺さぶり、突き動かす力を持つアートを東北各地（88ヶ所）で無償の祭りとして展開し、他地域とも繋がる。）

東北の再生が日本の未来であることを感じ取っていく。

- ・田中先生：森里海連環をベースに、巨大防潮堤問題や放射能汚染問題を乗り越えながら、長期的・歴史的・統合的視点を生かしての再生をめざす。いのちのふるさと（海）を捨てる先に未来はない！
- ・石田先生：2030年をクリアしつつ、テクノロジーを新しい暮らしの道具にし、依存から自立の道を模索しなくてはならない。ネイチャーテック、90歳ヒアリング等を通じて、新しい暮らしを具現化させていく。
- ・藻谷先生：この地は、30年後には広島、長崎と同じように生き残れ、聖地となりうるのではないか。分断し、比較し、相手を非難しあっては、再生のエネルギーは出てこない！

② 学生・若者によるメッセージ・ダイアログ

- ・中学生：この自然の豊かさをどう取戻せるか？利便性なくして、魅力も生まれない
- ・高校生：行動することが大切で、踏みとどまってはいけない
- ・専門生：除染を急ぎ、交通網の整備を推進すべし
- ・大学生：東日本大震災を機に、人材の育成が急務であることを再認識
- ・ダイアログ：若者とコミュニティーの情報交換・共有の手段をどう作っていくか！

③ 懇親会

- ・相馬公：相馬800年の歴史の中では、今回以上の艱難辛苦を幾多も乗り越えてきた。この相双の歴史を糧に、今回も英知を結集して乗り越え、新たな歴史の証明を示したい！

④ 分科会とまとめ

- ・分科会1：相双地区の豊かさとは、なんだったのかを問いなおす
——過去を見つめて未来を紡ぎだす！（お金で作られない価値を見出す、あるものの価値に気づく、地域社会の中で劇場を作り・感動を創りだす、子育てには文化が必要、平成のご仕法は何か？長いスパンで物事を考え、細かく分断せずに相馬国のレベルで再興を！100～200年後へのご恩返しを）
——世界で注目されている以上、世界にここの文化を発信していくことが可能！
- ・分科会2：この土地で暮らすために（原発に依存しない新たな暮らし方）
——従来の豊かさゆえに復興を阻害しているマイナス要素を払拭しつつ、

今一度原点に立ち戻っての自然観、物質感、循環意識を取り戻しながら、地産地消を軸にした最先端モデルを創出し、世界へ発信して行く

——農林漁業をつなぎながら、テクノロジーに依存せず、自立の道を模索してく。「再エネの里」のような総合的再生モデルの創出、発信を推進していく。

・分科会3：分断から新しいコミュニティーの形成へ（心身のケア、子育て、家族・世代のつながり）

——この場所を一番楽しい場所にしていくための対話の場を、この分科会を引継ぎ、継続していく（つなぎ役や継続的なイベントの場づくり、語る場と実行する場を）、そして様々な仕事をつくり、若者が集まる医療やサブカル系の学校等を作っていけないか

——特に子ども達の遊べる場、若者たちのデートできる場をしっかりと拡充していくことで、コミュニティーの再生を図っていく！

・分科会4：そうした時に、お金はどのような役割を持つべきなのか

——今回の震災によって地域金融の原点が、あぶくま信金の動きによって蘇った（ライフラインとしての金融の存在、株式会社組織とは一線を画した協同組織金融機関としての行動原理）、そしてその目利き力、情報収集能力等を活かして復興に向けた新たな金融の形が模索ができるのではないか？

——全ての人が戻りきれないとすれば、逆に外の人を呼ぶ魅力をどうつくり、発信できるか、そのための枠組み作り（小さな実践を創り上げれるたまり場の組成も含む、復興会社のイメージを漸次具体化していく）が急務となる

・分科会5：若者たちの主張

——「一步を踏み出すべー！」そのためには、学生と地域が接点する場所の形成、学生にも正しい情報を提供していく等が重要

——学生・若者たちから市長や大人たちに対しても率直な意見を表明があった

⑤ 参加者による討論会・市長への提言

・田中南砺市長：2年前のローカルサミットでの提言「エコビレッジ構想」を実現すべく動いている。朝令暮改であっても、七転び八起きの精神で失敗を怖れずに動いている。南砺は相双とのご縁で、いつも繋がっていると思っている。市長に言いにくければ、facebook,line,等で意見を頂ければ、すぐに市長にお伝えする！

- ・ 及川副院長：20年後にここを世界遺産としていくために若者たちを含め皆で力を合わせられないか？その実現に向けては、特に疫学の知の集積地
にしたい！
- ・ 木村さん：新しい暮らしの積み重ねの中で、どういう豊かさを創りだしていけるか？
- ・ 赤坂先生：「汝の足許を深く掘れ、そこに泉あれ」という言葉を心に刻み
ながら、大人達は、投げかけていることを自ら引き受け、子ども達と一緒に
動き出す。
- ・ 桜井市長：学生・若者たちとの対話を通じ、再生に向けての多くのエネルギー
を頂き、市民と一緒に仕事をすることの重要性を改めて感じた。ここ
に住んでいることに永遠を感じ取れることをどう創りだせるか？失敗は
いつものことであるが、その時、住民の方が問題を抱え、同時にお叱り
を受けるが、それを逆に難問に立ち向かうパワーに代えて向かって行きたい。
残り3ヶ月の任期であるが、これまで同様愚直に自然体で突っ走って行きたい！
また、毎朝走りながら、自然や生き物の蘇る力を感じている。人間は
もっ
と謙虚に地球の声を聞かなくてはならないとも痛感している。

⑥ 総括（事務総長私見）

- ・ 震災と原発はこの相双の地に負のエネルギーをもたらした。しかし、それは、今、未来への再生のエネルギーとなって現れて来ている様に感じた。ただ、この再生の道筋は、決して容易ではなく、かつ長い道のりであるが、この相双には、それを受け入れる土地の力、人の徳、そしてそれらを生んだ歴史の積み重ねがある。
今一度、原点に立ち戻り、足許を見つめなおし、未来を描き出していく。
皆で一步を踏み出す勇気と力を持つ。その時、これまでの仕切りやつながりを乗り越え、新しいつながりを創っていく覚悟を持たなくてははいけ

ない。行政や国に頼るのではなく、志民自らが連帯の中で、未来を切り拓く勇気を抱きながら。

そして、新しい暮らし方を創り、これまでの血縁だけでなく、新たな地縁で多くの外の人を呼び込む魅力を生み出してく。

こうした多様な実践の蓄積から、再生に向けた御仕法が現れてくるのではないか。

相双の復興・再生なくして東北の復興はなく、日本の未来は紡ぎ出せないことを皆で確認しつつ、皆で連帯しつつ、一步を踏み出して行こう！

⑦ 御礼

この2日間で、相双において復興に向けた希望のメッセージを感じ取れたことに、深く感謝しつつ、参加者、関係者の方々に厚く御礼を申し上げます。最後に、二宮尊徳の「荒地は荒地の力によって開くべし」の言葉を思い出しながら、雨の中の相双を後にいたしました。また引き続き通いたいと思いながら。

ありがとうございました！

以上

第6回ローカルサミットIN上州・南相馬

高崎セッション（2013.11.02~03）

第6回ローカルサミットIN上州、南相馬のまとめ

今、我々はどうも不気味な世界に生きているのではないのでしょうか？

果てないグローバルリズムの中で、どこかで誰かが、地球大の破滅の引き金を引きかねないというおびえを抱きながら、一方で、誰かがそれを食い止めてくれるのではないかという安易な楽観に支えられているような気がします。

そうした中、我々全国の志民は、ローカルサミットで初めての野心的な形態となった、この6週間に亘るローカルサミットIN上州・南相馬の各開催地を巡るフィールドワークの中で、「ローカルを磨きあげることで、魅力ある多様なローカルを創り、その各々が真摯に語り合い、新しいつながりを形成していく

ことで、真のグローバリズムが生まれる」ということ確認したように思います。

そして、それを実現するためには、①未来へ向かう子ども達、若者達との世代を超えた熱いダイアログを絶やさず、②山村等の伝統的社会に未来へ、グローバルへ繋がる鍵があることを忘れずに（「足許を掘れ、そこに泉あり」）、①一步を踏出すことです（「一步踏出すべし」）。更に、我々が忘れてはならないことは、相双地区（少子高齢化と人口流出が急速に進み、かつ放射能汚染により故郷喪失に直面している荒地）の復興なくして、東北の復興はなく、日本、そして地球の再生は無いということです！自然、人間、歴史、食、そしてものづくりに秀でているニッポンに住む皆が、先人達から引継いで来た豊富なお金を上手く活用して、いのちを営々と繋いでいく環境・生命文明社会を創るアクションを起こして、100年後に何を残せるかを機軸に、結果を出していきたいと思います！そうしたアクションを今後も継続的に、「にっぽんの・・・」等を活用し、確認し合いながら、来年は神仏習合の聖地とも言える高野山でまた会いたいと思います！

第7回ローカルサミットIN高野山（2014年11月1～3日）

（高野山サミットのまとめと閉会の辞）

最終日にあたり、今回のローカルサミットのまとめを事務総長として申し上げます。

この三日間を通じて、2050年の環境・生命文明社会を高野山からデッサンするという全体テーマについては、皆様、様々な形での学び、ヒントを得たと確信しています。その意味で、大変有意義なサミットであったと思います。地域に埋もれている本来の価値を引き出しながら、生きとし生けるものとともに暮らすことへのアプローチを、ローカルから始めなくてはならないことが明確に確認されたと思います。

これを敷衍しますと、まず、この7年間に語られてきた様々なキーワードが具体の形でより明確に肉付けされたのではないのでしょうか。第2回到提示された

「確かな未来は懐かしい過去にある」という言葉が、「前近代の仕組みを洗い出すことで、近代の課題を超越することが出来る。特殊解が普遍性を持ちうる、一般解は凡庸な答えしか生まない。言わば、その最先端に高野山がある」という語りにより具体の形で示されました。第3回に提唱された森里海連環による地域づくりの重要性は、「鎮守の森と鎮守の海を守ることで日本再生のランドデザインを描きださなくてはならない」という迫力かつ説得力あるメッセージで、一段と明確化されました。そして、第4回で宣言した「人と人、人と自然、生と死の確かな関係を紡ぎ直す、いのちの紡ぎ直しを今こそ行わなくてはいけない」という言葉は、民衆の密教的世界に育まれることの大切さに改めて気づく中で、この高野山の霊気と密教の思想と共に、皆の心の中にストーンと落ちたのではないのでしょうか。

第二に、この三日間を通じて皆で共有した問いは、「いのちの本質を捉えながらどう『つながり』を取り戻すか?」、であり、「利便性追求の『依存』から利他に裏打ちされた大欲に基づく『自立』へどのように、その『間』を埋めていけるのか?」であったと思います。そして、それを埋める要素としては、霊気あふれる自然に抱かれること（縁）、様々なつながりを再構築すること（縁）、またその中で形成される一定の決まりごとを認め、諒解すること（ルール）、更には、根源的な人間の心の見直しであり、最後の点については、宗教や祈りの役割の重要性が強く言及されたものと思います。

一方、翻って高野山の暮らしをみるとどうなのでありましょうか。まず、1200年営々と営まれてきたこの聖地の暮らしを支えてきたものは何であったのか。80年前、30年前、そして今についての映像やインタビューを通して、寺の一員として暮らすことを一つ一つ積み重ねながら、20年、50年へといのちがバトタッチされ、その中でここにしかないものが生まれ、紡ぎだされていくということに整理されました。その観点で足許をみると、この間の営々とした暮らしを支えてきた仕組みが様々な形で壊れてしまっているのではないのでしょうか。そして、その意味で、見直すべき課題が、様々な浮かび上がってきました。人口減少にも耐えうる負荷の少ない観光、言い換えるとモータリゼーションへの対応として、かつてのように山上には車を入れないような仕組みが出来ないのか。途切れてしまった山上と里との関係をかつての雑事（そうじ）の復活のような形で取り戻せないのか。高野山の自然をかつて関西のこども達が満喫したような林間学校が復活できないのか。この高野山の開創に当って、空海が「山高きときは雲雨物を潤し、水積もるときは魚龍産化す」と上奏したように、この高野山は水の聖地でもあり、その水の循環を目に見えるようにコンクリートで埋め込まれたふたを開けることは出来ないのか。高野山中学生達が感

動的に発表してくれたような郷土愛を育む教育をどう紡ぎだしていけるのか。等々の諸点でありました。これらについて、今後、高野山の志民が様々な形で取組んでいくことを期待しています。

最後にこの三日間のサミットを経て、次の2点を事務総長として、ご提案申し上げます。

まず、生きとし生けるものとの暮らしを取り戻すための国民運動を展開していかないと、我々に残されている時間的な猶予は少ないのではないか。その意味では、鎮守の森、鎮守の海を守るべく、森里川海連環の観点から新たなつながりを再構築すべく幅広く志金を集め、それを活かす方途を探れないものでしょうか。その具体的な方法論も含め幅広く議論すべきタイミングではないでしょうか。また、未来を創る子供たちに、豊かな海辺や森の自然に触れ、五感を研ぎ澄ませることの出来る時間をもっと持てるような仕組みが出来ないものでしょうか。

今ひとつは、こうした生きとし生けるものと共に暮らす心持ちを我々が常に再確認し、全国各地の様々な動きを相互に学び合う場を、この高野山において、ローカルサミットとは別の形で、例えば年に一回高野山会議のような形で開催できないものでしょうか。今回のローカルサミットの成果は、何よりもこの靈気あふれる靈地というこの場所で開催されたことに起因すると皆が感じているゆえ、年に少なくとも一度は俗事から離れて生きとしいけるものと一体になる時間を持って、語り合いたいと思うのです。そしてそれを通じて、高野山の志民との新たな連携も深めていければと念じていますので、是非、ご一緒に検討させていただきたく思います。

そして、最後の最後になりますが、今回のローカルサミットを通じて、ローカルサミットは我々にとっては、言わば三密加持の行であり、志民同士の新しいコミュニティー空間の創出の場であるということを確認しました。従って、今後ともこのローカルサミットを出来る限り継続していく覚悟をここに宣言し、今回のサミットを閉会いたします。

第8回ローカルサミットIN酒田・庄内（2015.10.10~12）

『庄内独立宣言』

「確かな未来は懐かしい過去にある」

過去7回のローカルサミットで確認したことの一つです。

明治の開国以降、日本は西洋列強に追い付け追い越せと、物質的な進化を求めて経済発展に突き進んできました。先の大戦で焦土と化した国土を復興させ、一度はその先頭に躍り出たかと思われました。

しかし、バブル崩壊以降、目標を見失ったまま混迷を続け、本格的な人口減少社会を迎えた今、従来の成長モデルはすでに通用しないばかりか、先行きへの不安が人々の活動を萎縮させ、出生率の低下などに繋がるという悪循環に陥っております。

そもそも、私たちが向かってきた物質文明社会の先に、明るい未来が描けないことや、政府主導で全国一律の画一的な施策では、歴史や文化の異なる地域すべてに費用に見合う効果をもたらすことが不可能であることは、過去のローカルサミットのまとめからも明らかです。

日本中の各地域が、それぞれの場所文化に根差した将来像を描き、自らの手によって、それを実現させねばなりません。

それでは、私たち庄内に暮らす者が振り返るべき「懐かしい過去」とは一体どのようなものか、改めて考えてみたいと思います。

庄内の黄金時代、それは江戸時代だったと思います。1622年、最上氏に代わって酒井氏が入府し、鶴岡に居城を構えました。以来、その善政によって、領民たちは皆、心豊かに暮らしていました。1840年の三方領知替えの危機の際には、農民が立ち上がり、命がけで幕府の命令を撤回させました。一方、湊町酒田は、1672年に河村瑞

賢によって西廻り航路が確立されると、北前船の寄港地として、大いに繁栄しました。

酒井の殿様の城下町鶴岡と北前船交易の湊町酒田異なる性格を持ちつつ栄えた2つの都市ですが、酒井家の善政とそれを支えた本間家はじめ豪商の財力、そのどちらを欠いても、この庄内の繁栄は無かったでしょう。

その黄金時代の基礎となったのは、この豊かで、時に厳しい庄内の自然に育まれ、質素な中にも、心豊かな、安定した生活があり、そして、物質的な安定に加えて、他者を思いやる心、利他の精神がしっかりと根付いていたことにあります。

私たちが取り戻すべきは、物質至上主義で見失った、この自然への畏敬の念と他者を思いやる利他の心ではないでしょうか。

私は週に一度、大空からこの庄内平野を眺めます。

田植え前、田圃一面に水を湛えた春。萌え出ずる草花の一つひとつから生命を感じる夏。一面黄金色に染まった収穫の秋。白一色の中にも息をのむ一瞬の美しさを秘めた冬。夜になれば、その明かりの一つひとつに温かな営みを感じます。

この庄内平野、いつ見ても、どこを見ても、線など引いてありません。あるのは、私たちの心の中にある見えない壁。この見えない壁を取り除くのは、決して容易ではありません。私たちは「庄内は一つ」という確固たる信念をもって、様々な課題に取り組まなければなりません。

今から35年後の2050年皆さんの目に、どのような未来像が映るでしょうか。

子供たちが自然の中で自由に遊び、自然と共に学び、子育て世代が安心して子供を産み育てる様子。

疾病予防、先進治療、リハビリテーション、介護、そして、終末期まで一貫した広域医療システムが整備され、システムだけではない、看取りの文化がひろまって、逝く人も見送る人も穏やかに最期の時を迎えられる様子。

様々な立場の方が、役人だから、女性だから、若者だから、高齢者だから、障害者だから、ということを経験にしないで、対話しながら活動していける様子。

地域の農業と集落が維持できるように生産者と消費者とが密接に繋がり、支え合い、名実共に食糧自給「力」100%を実感できる様子。

「自然エネルギーは地域のもの」という認識のもと、顔の見える関係の中で、貸し借りができて、地域内の自給自足ができていく様子。

地方創生ファンドによって、温かいお金が、目に見える形で地元の中で循環できている様子。

それらすべては、この庄内の自然の恵み森里川海の理想郷、庄内だからこそ実現できることです。

ここ庄内に住む「志民」一人ひとり、そして、この庄内地域を愛する全ての「第二志民」の人たちが、他人の喜びを我がことのように喜び、他人の悲しみを我がことのように分かち合う、そのような社会を私たちは実現させます。

私たちは、過去のしがらみから決別し、物質至上主義、都市型の発展指向から決別し、私たちの心豊かな生活に誇りを持ちます。

この庄内の森里川海と私たちは一体であり、庄内全体が独立した存在であることを身体全体で感じ、地域内での循環、外部との連携など、まさに「独立国としての矜持」をもって、この豊かな郷土を将来の子孫にしっかりと引き継ぐことをこのローカルサミット

in酒田・庄内に参加したすべての皆さんとともに宣言し、この庄内の取り組みが、新たな日本のモデル、そして、世界のモデルとなることを確信し、「庄内独立宣言」といたします。

平成27年10月12日
第8回ローカルサミットin酒田・庄内
実行委員長 前田直之

第9回ローカルサミット宣言 i n 倉敷おかやま (2016.11.03~06)

大原總一郎氏によって提唱され62年前に設立された高梁川流域連盟は途切れることなく連綿と活動が受け継がれてきた。そして、60周年を期に流域サミット宣言を発出して新たな流域連携の時代に入った。

くしくも本年G7教育大臣会合が開催された倉敷に集った我々、全国の志民は、この倉敷に蓄積された歴史・文化・自然豊かな場の中で、現代の様々な課題、一流の地域づくりとは何か、持続可能なローカル社会での新たな暮らし方とは何か等について熱く話し合い、世代を超えて多様な志といのちをつなぐことの重要性を確認した。共に生活者であることを再確認し、大人、子ども、文化・教育・経済・行政・宗教・医療・福祉・地域関係者等、多種多様の地域を愛する人たちが、深く連携し、様々な共同作業を通じて、出会いの場をつくり、お互いの顔を合わせ、本音を語り合う機会をつくることが重要であり、そこに集った人達が、次世代の若者達にこれまでの過ちを正し、真の地域の宝物を受け継いでいくことこそ、確かな持続可能な未来を創ることが出来る。そのリアルな現場として、豊かな水が多様な生命を育み、上流と下流とが相互に補完してきた「流域」をベースに思考し、新たな社会をデザインすることが重要であり、これによって、多様な志をつなぐことが可能になることを確認した。

今回は多くの生徒、学生が参加し、将来に向けたビジョンを考えた。大人と子どもが本音で語り合い、未来を創り出す責任は今にあるという認識のもと、未来に生きる将来世代の意見に真摯に耳を傾け、将来世代が描く未来に一步でも近づけるよう、大人達が今を変えることに勇気を持って行動することをここ

に宣言する。

平成28年11月6日
倉敷にて
第9回ローカルサミットIN倉敷・おかやま実行委員長
梶谷俊介

第10回ローカルサミット宣言IN東近江（2017. 12. 01~03）

日本の縮図（1000分の一のスケール）である東近江から拓く未来の姿をこの3日間で全国の志民の方々との交流、議論で描き出しました。

まず、大きく3つの視点の重要性を改めて確認しました。

1. いのちのふるさと海（湖）・水と共に生きる社会の再生です。

人と自然、人と人との「つながり」を取り戻さなくては、なりません。一度崩れた自然資産の再生には半世紀の時間が必要となります。その意味では、今後10～15年が試金石であり、価値判断基準を未来世代の幸せにおかねばなりません。

そして、何よりも、自然資産と文化（人）を次世代につなぐには、子ども時代の原体験がきわめて重要と考えます。

2. 集権的・強権的システムに従属した生き方から、自分達で生きる場を創造する時代へ移行しなくてはなりません。

戦後70年強を通じて、巨大システムの中のポジション取りでしかなかった生き方から脱皮し、近代以前の社会が持っていたものに未来のヒントを求め、小さな単位（地域）をベースにして、大きな単位（県、国）へ権限を委託する仕組みを改めて構想していかななくてはなりません。

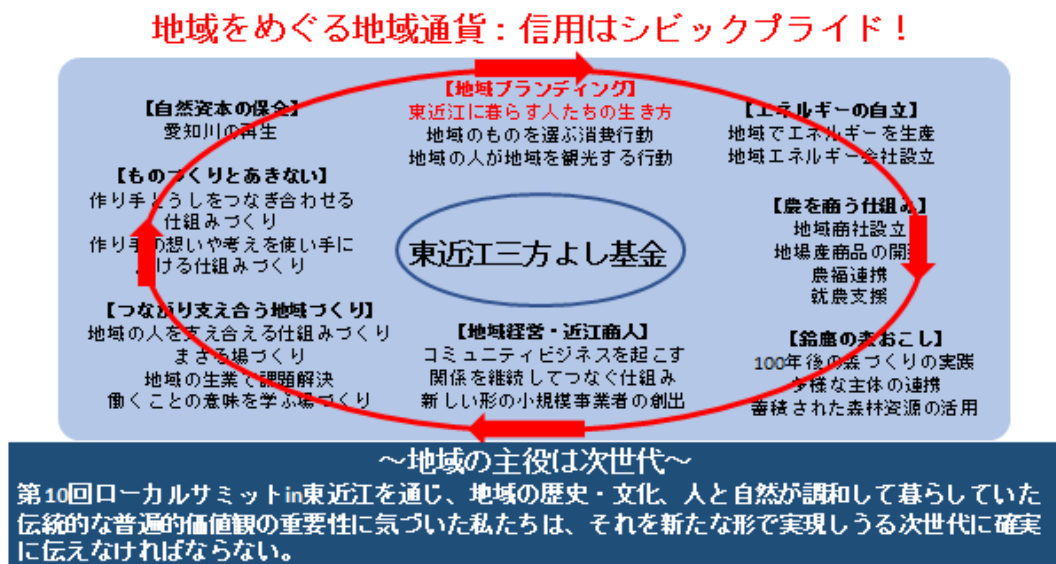
そして、強い国家を取り戻す幻想に惑わされず、新たな伝統回帰によるしなやかな社会を構築します。

3. お金に振り回されず、お金に意思を込めて、お金の流れを変えて未来を創ります。

いのちをつなぐ道具としての本来の金融のあり方が問われている今、気候変動問題に直面し、地球規模で意思を持ったお金の流れが急速に生まれています。また、社会的投資等によって、人と人の繋がりや企業の姿を変えるローカルの動きを支える新しい金融の仕組みを実装していきます。

そして、ヒトの育成、モノ・カネ・情報の循環によって、心豊かな社会を創ることこそが何よりも、急務であると考えます。

フィールドワークと分科会等を通じて、この日本の縮図といえる、東近江を自立・循環させていく姿を次のように描き出しました！そして、その実現のためのキーワードは、地域の主役は次世代であり、その育成と次世代への継承が最重要課題と皆で認識をすり合わせる事が出来ました。



平成29年12月3日

東近江にて

第10回ローカルサミットIN東近江

実行委員長 山口美知子